



2014・12

**SORA** 58号

長崎 鳳 蝨 華

芋の葉の若きは露を寄せつけず  
夜汽車の灯耿耿と秋深まりぬ  
波戸を出て釣瓶落しと正対す  
此の径の此処に思ひ出いわし雲  
桜紅葉尻目に人生下り坂

福岡 栗原 京子

旅に出て祭の渦に吞まれたり  
大和より稚魚取り寄せし祭かな  
風船は飛ばさず鳩を放つまで  
手相見の髭の乱れや放生会  
放生会果てて香具師らは次の町

東京 今井 春生

青空市どこか祖母似の柘榴売り  
弦のなきビオロン売らる秋の風  
魚市場におとなしき猫秋の昼  
秋光の満ちる小島やマリア教会  
星月夜白鳥の首羽根の中

福岡 亀井 紀子

ひとつづつ橋に名のあり夕紅葉  
船団の先に神官みあれ祭  
新米や祖母の口癖思ひつつ  
足攣つてのた打ち回る神の留守  
スカーフの風にしたがふ秋日和

福岡 あさなが捷

国東に千年の寺牡丹鍋

着膨れて昭和の歌を大合唱

晴天や肩丸々と雪だるま

鯉鮓屋に四角い椅子や十二月

鯰の来て厨たちまち動き出す

東京 山田 正子

檸檬かじるトパーズ色の汁はこれ

水鏡収まりきれぬ鱗雲

屋上の芒に夕陽六本木

雁渡し又三郎が戸を叩く

近松忌裏地の勝る羽織かな

東京 古川 夏子

月の雁跡取りのなき山の寺

舟灯川面ににじむ十三夜

むら立ちし杉群青に今日の月

宵闇の迦陵頻伽や平等院

秋暑の運河小暗き浚漉船

大阪 青木 朋子

吾の首搦め損ねし蜘蛛の糸

コスモス野逆光に撮る白一花

コスモスの匂の中や車椅子

空色の帽子一列コスモス田

秋の陽のきらめき川に掬ひけり

空作品抄  
柴田佐知子抽出

大花野五体伸びゆく心地して

火山灰固く付きたる返り花

風呂敷を畳んで返す椿の実

土間抜けて風の裏庭破芭蕉

しづけさや銅鏡出でし蜜柑畑

正月や年端もゆかぬ頃がよし

池干の泥鯉抱きまた転ぶ

猫舌の母をからかひ玉子酒

夫と世を隔てし朝の露の音

三代もたてばうやむや烏瓜

いくたびも曲がりて訪へり盆の家

高倉 和子

中田みなみ

荒井干佐代

服部 早苗

柴田志津子

だいじみどり

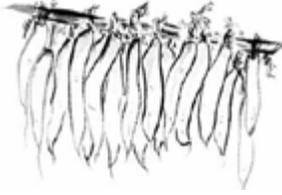
野 上 杏

小林 朱夏

田代 貞枝

吉 田 菫

矢野百合子



街路樹の幹の捲れや冬に入る

らふそくは結界の灯鳥渡る

河豚汁や海底にある坂越えて

家系図は長き名ばかり式部の実

買ひ手来て牛従はぬ秋の暮

腕力を誇りし昔吾亦紅

育てたる菊に包まれ義母逝けり

手放すと決めし土地なり大根蒔く

満月や舞台裏より能役者

丈詰めて仏間の菊の水替ふる

鬼蜻蜓超合金の翅を打つ

供へたし新米をとぐ音と香を

此の径の此処に思ひ出いわし雲

旅に出て祭の渦に吞まれたり

ひとつつつ橋に名のあり夕紅葉

鱒の来て厨たちまち動き出す

山内 碧

戸栗 末廣

宮井 知英

樋口 みのぶ

原 友子

吉村 摂護

秋 千晴

井浦 美佐子

松田 明子

苑 実耶

田岡 千章

野畑 さゆり

鳳 蛮華

栗原 京子

亀井 紀子

あさなが 捷

近松忌裏地の勝る羽織かな  
月の雁跡取りのなき山の寺  
吾の首搦め損ねし蜘蛛の糸  
鮫鱈の貌は忘れて食べてをり  
その中に鳴くを怠けてゐる虫も  
集まつてあそぶ老人草の絮  
はらからの来さうな日和菊活くる  
両手もて満月作り外へ誘ふ  
敬老巳名札で結ぶ下足かな  
荒縄を二本わたせる萩のみち  
稲架組んで故山の裾の広がりぬ  
鯛や母の押入れがらんどう  
殉教の地より始まるいわし雲  
好きなわけ幾つも数へ良夜かな  
銀河より零れて来しか浮御堂  
青空を押しして広がる鱗雲

山田 正子  
古川 夏子  
青木 朋子  
小林 朱夏  
押田 裕見子  
天谷 翔子  
井浦 美佐子  
白水 良子  
石川 叔子  
戸栗 末廣  
田中 とし江  
林 徹也  
山本 則男  
乾 有杏  
織田 高暢  
小川 涼



好きな子の門に寒拆強く打つ  
校庭を遠まきの木々小鳥来る  
名月の差し込む窓へ夜具うつす  
いぼむしり死して万歳してゐたり  
車道へと歩む秋蝶戻したる  
かなかなや父母ねむる寺の鐘  
授業とて落穂拾ひし我が戦後  
曼珠沙華いつもの道に立つてゐる  
振り向きし蠶螂の眼のうすみどり  
棟梁の槌の確かさ秋高し  
秋祭医療師の席設けられ  
カリヨンの重なり響く秋晴雨  
涸れ果てたはずの涙よ秋夕焼  
青蜜柑島より島へ風わたる  
百名山松茸採れることを秘す  
筑紫野の仏大きく冬に入る

小谷 一夫  
遠山のり子  
田邊 豊子  
えとう樹里  
今井 春生  
上川 いつ子  
山口 弘子  
酒井 みち子  
横田 敬子  
田代 貞枝  
井上 義郎  
清水 量子  
仲里 奈央  
森 俊人  
橋本 知笑  
森 真二

# 空作品評

柴田佐知子

正月や年端もゆかぬ頃がよし だいじみどり

朝起きると、家の中も外もきちんとしている。待っていたお正月である。両親の様子もいつもとは違うところも何だか嬉しかった。十代・二十代・三十代など：いつに戻ってみたいかと問われても、答えに詰まる。しかし「年端もゆかぬ頃がよし」には共感する。それほど多くの記憶が残っているわけではないが、毎日がゆっくり過ぎていた：ような気がする。季語の、正月やゝが動かない。

猫舌の母をからかひ玉子酒 小林 朱夏

寒い冬の夜に、時々母が甘い玉子酒を作ってくれた。子供も、ほんのちよつと舐めさせてくれた。出来立ての卯酒はとろりとして、飲むとすぐに体がぼかぼかしてきた。

「猫舌の母をからかひ」：母と娘の楽しいひと時が描きだされている。暮しの中の寸景がいきいきとした臨場感をもって詠まれている。

三代もたてばうやむや烏瓜 吉田 菫

歴史に名を残すような人物でも、すべてが伝わるわけではない。大方の人間は、時の流れの中で近親の者の記憶からも消えていくのだ。私も早く亡くなった父方の祖父のことは「うやむや」どころかほとんど知らない。「三代」が的確だ。

はらからの来さうな日和菊活くる 井浦美佐子

美佐子さんの屋敷や地続きの畑には、様々な花が植えられていている。秋晴れの気持ちのよい日であろう。気分もどこか晴れやかになる。「はらからの来さうな日和」によって、兄弟の仲の良さも伝わってくる。「手放すと決めし土地なり大根蒔く 美佐子」最後の大根撒きになるのかもしれない。しみじみとした響きがある。

荒縄を二本わたせる萩のみち 戸栗 末廣

両側に萩が植えられた径。人が通れないほどにじだれてくるのであろう。それを支えるには縄一本を渡せ

ば足りるのである。左右で二本。単純にして萩の姿の本質が鮮明にとらえられている。

好きなわけ幾つも数へ良夜かな 乾 有杏

好きな理由がいくつもいくつも考えられるとは何とも羨ましい。細かい状況は呈示されていないが、それで十分だ。幸せな良夜だ。

名月の差し込む窓へ夜具うつす 田邊 豊子

街に住んでいると、月光の明るさを忘れがちだが、以前、修験道の地で夕食後に行者杉を見に行つたことがある。満月の明るさは驚くばかりで、地には一人一人がくつきりと影を曳いており影踏み遊びが出来た。月光の道で開いた歳時記の小さな字がはつきりと見えたことが忘れられない。さて掲句、豊子さんはよりの光を浴ぶべく蒲団を窓側へずらしたのである。灯を消した部屋に差し込む月の光とともに、たおやかな情感がひろがってくる。

曼珠沙華いつもの道に立つてゐる 酒井みち子

ありふれた景が詠まれているのだが、曼珠沙華が「ふ

るさとの畦に」などといったお決まりのフレーズとは異なり不可思議な雰囲気が漂う。毎年同じところに決まって咲く曼珠沙華。へいいつもの道に」とへ立つてゐる」との相乗効果であろう。選択する言葉によって、言い尽くされたかに思える内容に新しさを与えることができるのだ。

好きな子の門に寒拆強く打つ 小谷 一夫

この頃はあまり見かけなくなつたが、拍子木を叩きながら「火の用心」と呼ばわつて町内を歩いていた。〈寒拆〉はその拍子木の音。拍子木を叩いているのは着ぶくれた男の子であろう。〈好きな子の門へ〉いい。

そのほか触れたかつた作品の一部をあげる。

池干の泥鯉抱きまた転ぶ 野上 杏  
此の径の此処に思ひ出いわし雲 鳳 蛮華  
敬老日名札で結ぶ下足かな 石川 叔子  
銀河より零れて来しか浮御堂 織田 高暢  
校庭を遠まきの木々小鳥来る 遠山のり子  
いぼむしり死して万歳してゐたり えとう樹里  
涸れ果てたはずの涙よ秋夕焼 仲里 奈央  
青蜜柑島より島へ風わたる 森 俊人

# 空集

## 柴田佐知子選

糸島 小林朱夏

鮫鱈の貌は忘れて食べてをり  
冬耕や地蔵の丈に鍬上ぐる

豊満な乳を与ふる雪女

寒鯉の河床の色となりにつけり

闇に寝て時雨過ぐれば無音なり

妹が泣けば姉泣く福寿草

ゆつくり鳴る柱時計や小鳥来る

靴さげて泣いてくる子や葉鶏頭

かまぼこの底板厚し初しぐれ

運動会あすに白線引き直す

ご近所に声かけ囲む泥鰌汁

ちやんちやんこ着て床屋までゆくと云ふ

ビー玉に光さし込む定家の忌  
粕屋 吉田 葎

新涼やビルの硝子にビル映る

爽涼や歩幅の広き添乗員

妹を置き去りにして草紅葉

虫時雨また言訳をする男

廃屋の殺気立ちたる曼珠沙華

大銀杏鬪志あらはに枯れにつけり

一瞬の風に崩るる秋の蝶

毎日が千日手なり白障子

病み耄け背負ふもの無し青木の実

気を抜けば逝くかも知れぬ冬の虹

秋夕焼老いては口を真一文字

自転車を連ね通学稲穂波

衣被節樽の指隠れなし

城跡は風湧くところ花芒

老眼鏡釣瓶落しへ外しつけり

そぞろ寒嘘に黙つて頷かれ

菊花展三十六峰平らなり

秋彼岸幼き僧を連れ来たる

小鳥来る一人居の窓少し開け

さやけしや筆圧強き父の文

運動会準備体操来賓も

百才の母まん中に菊の酒

うどん屋に水車のまはる秋日和

その中に鳴くを怠けてゐる虫も

干されゐて気色ばみたる唐辛子

極楽と云うて紅葉の露天風呂

剥製の熊の牙むく月の宿

肩肘を張れる案山子の不精髭

棟上げの棟梁の声空高し

とら河豚の釣られたちまち歯を折らる

地藏堂に老犬居着き花八手

つなぎたる指より冷えの来たりけり

道行の雪を払へる初芝居

須惠 苑 実耶

リヤカーに山と積まれて松飾り

衿開けて刷毛を当てたる初化粧

集まつてあそぶ老人草の絮

ひとりゐて喪の色となる花野かな

心中のごとし花野に横たはり

良夜かな御所に水音砂利の音

風音に混じりてゐたる鹿の声

叱られし顔を上げずに葛湯吹く

鱗雲鱗大きくほどけたる

看板の大地酒屋秋の風

水浴びの順待つ鶴葉の陰に

宵の雨降りつくしたる望の月

亡き母が傍に来てゐる衣被

居眠りの子へチョーク飛ぶ残暑かな

出港の汽笛に混る鹿の声

老鹿の座れば目閉つ自づから

京都 天谷翔子

福岡 山内 碧

新宮 井浦美佐子